

若者の被差別経験

対抗メッセージ構築の課題

西田芳正

要約 43人の語りのうち部落差別経験を取り出して、その特徴を分析した。恋愛・結婚、就職の際、そして日常生活で、以前と同様の差別が繰り返されており、近年の「不祥事」を受けて部落を非難する意識が加わり、ネガティブなまなざしが向けられている。若い世代は、部落問題についての認識を得る機会をもたず、無防備な形で差別に直面する危険性が高まっており、誤った情報にもとづく否定的なまなざしを乗り越える対抗メッセージを構築し発信することが緊急の課題である。

1 課題設定

今回の聞き取り調査の主題は、部落の若者の就労の実態、雇用の不安定性がもたらす困難な状況の把握に置かれている。しかし、生育家族の状況から現在の生活までを自由に語ってもらうという調査手法を採用したことから、聞き取りの場面では多様な生活経験が語られることになり、そのなかには、本人だけでなく家族や友人など身近な人が経験した部落差別に関する言及が数多くなされた。

部落差別事象の実態については、「部落差別は減少傾向にある」という見方がされることが多い。「過去にはあったようですが、最近は、自分も身近な人についても差別を見聞きしたことはありません」と語る者が今回の対象者の中にいたことも事実である。しかしながら、「こんな差別がいまだに続いているのか」と聞き取る側が驚かされるような内容が語られるケースも少なくなかった他、差別事件が潜在化する傾向、近年の変化のなかで新たに加わった被差別状況が存在することも浮かび上がってきた。

以前と比べ、何が引き継がれ、何が新たな要素として付加されたのか。差別的な意識の持ち

主の背景や差別経験の受け止められ方はどのようなものなのか。差別を軽減、解消していくために求められる方策を構想するうえで、現状の詳細な把握が不可欠の課題である。

本論に入る前に、今回の調査協力者43人の特徴から留意すべきポイントをあげておく。

各地の解放同盟の支部を通して質問紙調査の協力者を募り、さらに聞き取り調査に応じてもらえる若者を紹介していただいた。そのため、聞き取り対象となった若者については、運動を担うリーダー層、青年部の活動を引き継ぐことを託された若手が多数を占め、運動の専従として働くケース（ただし、雇用形態は不安定なものが多い）も含まれている。

また、多様な地域の状況を捉える目的で、西日本の中核都市、地方都市、農村的な状況が残る地域など多様な部落から対象者を得た。ただし、1つの地区からは多くても3名ほどの聞き取りを行ったにとどまり、地区間の比較など、地域性に照準を合わせた分析を行うには不十分である。

本論では、語りの一部を引用しながら被差別経験の分析を進めて行く。次節以降、主要な差別事象について整理し、地域と時代という観点

から検討を加え、最後に今後に向けた課題を導く。なお、語りの引用については、繰り返しをはぶくなど最低限度の編集を施した他、対象者の居住地を伏せる目的から方言の言い回しを改変している。対象者の属性を引用部分の末尾に示し、必要に応じて言及された出来事の発生時点についても記載した。

2 近年の部落差別の諸相

1 結婚差別

最初に、恋愛・結婚に際して部落差別を経験した人たちの語りをいくつか示す。

「長く付き合ってたんですけど、向こうの親に『付き合うことはいいが、結婚することは許さん』みたいに言われました。当時妊娠してて、もう結婚するみたいになってたんですけど、『もう堕ろしてくれ』って言われて。悲しかったんですけど」(20・九州・30代・女性・10年前)

「自分、差別で子どもを亡くしてるんで」
「16の時ですね。『〇〇の方には嫁にやれん』」「反対されるのわかってたんですよ。〇〇っていうので。それで、中絶ができん時期まで黙ってたんです。で、6カ月まで黙っとったら、病院の方から母親手帳いうのを送りやがって、相手の家に。それで発覚して。で、呼ばれて、それでそのまま『〇〇の子には嫁にやれん』」(その後、強制的に病院で中絶させた)「その時、町役場に死亡診断書出さないかんのですけど、『それも出してくれるな。〇〇の子の子ども堕ろしたんがばれるようなものは出してくれるな』と。もうそこまできついことされた

いうんがあつて。もうそんな時に何も言えなかったんですよ。自分も勉強してないから。ほんでその〇〇がダメだというのも、やっぱりガラの悪いところではあるんですよ。ほんで、それが原因なのかと(当時は)思って。考えたら完全な差別なんですよ。そういう意識がなかったんで。そういう自分みたいな思いをもうさせないというのが一番ありますよね」(6・四国・30代・男性・15年前)

「(相手の)お姉さんが2人おるんですよ。2人が家に来て、『住む世界が違うから離れてあげて』という感じで言われましたね」(その後、娘を県外に連れ出されるなどして、実家との関係を絶つ形で結婚した。現在、夫の実家で結婚生活。相手の家とは車で10分ほどだが、行き来はない。孫の顔を一度見ただけ)「奥さんが一番つらいと思いますけどね、俺は」(3・四国・30代・男性・10年前)

「結婚差別的な話は、あんまり聞かない」(1)
「支部で相談を受けたことは一件もない、地区外との結婚ばかり」(19)だという語りの他3名が「聞かない」と語っている。先に結婚差別の事例を示してきたが、この食い違いをどう解釈したらいいのだろうか。

「彼女の方が両親に『〇〇の人、部落の人』って言ったら『絶対ダメ』って。『なんで好き好んで部落の人と結婚せないかんのか』みたいな感じで」「最終的には妻がずっと話をしていて、妻の両親も『あんたが好きになった人ならいいんじゃない』と最後は納得してもらえたみたいですけど」
「(この地区の人の結婚相手は)ほとんど地

区外と。地区内で部落の人達同士で結婚する方がまれですね【反対されたというのは】「あるのかもしれないですけど、聞いたことはないですね」…【ご本人も結婚差別「事件」という形にはあえてされなかったわけですね】「そうですね」「とっても悪質なのってあるじゃないですか。それこそ『解放新聞』に載るような。そこまでのけば多分言ってたと思うんですよ。まあ（自分の経験も）あからさまな差別なんですけど。でもレベルが違うというか。まだ話し合いでなんとかなるんじゃないかなというところがあって。最終的に自分たちで決めたのが、『何があるかと一緒にいる』て」（⑳・九州・30代・男性・15年前）

（友人が受けた結婚差別。友人は支部に相談は）「一切してなかったですね。（彼の）お父さんが、『どんな形でもいいから、お前が会ってくれていったら、すぐにでも行って挨拶するから』と。『お前がどんな対応に出ようと、お前らが結婚できればそれでええと思うから、そういう姿勢でいるから、心配せんでいい』と。『おじさんとかお母さんの耳に入ったら、糾弾やなんやっていう話になるから、それはお前がやりたいようにやれ』って言ったんですけど」（⑫・四国・20代・男性・4、5年前）

ここで紹介したのは、いずれも親か本人が地区の解放運動の担い手のケースである。しかし、「あからさま」な結婚差別であっても、「事件」として問題化することを避け、インフォーマルに、当事者同士の話し合いを通して解決、つまり結婚に至る可能性が追究されている。

ここまで、結婚差別の残存と潜在化について整理してきたが、交際、結婚に際して部落出身

であることがまったく問題にされなかったケースも複数あることを付記しておく。

2 就職差別

「ハローワークで仕事を探しに行って、ちょっと嫌な経験をしたことがあるんで、それ以降（ハローワークには）行ってないんです」「（雇用は）きついですね。もう地名出した時点でアウトですね」「紹介受けて面接行ったところで、地名いうか自分の住んでるとこ言った時点でもう、まあ、あからさまに『橋の向こうですか』とか、『こっちですか』とか（問われた）」「自分のなかで、もう言い返す言葉も、運動も全くしてなかったんで、言い返すこともできひんと、誰に相談したらええかもわからんまま、その時は放置いう形で終えましたね」（⑥・四国・30代・男性・15年ほど前）

「（父親が部落とわかる名字のために就職ができず、家族を養うために妻の名字を名乗ったという話の後で）それは後に僕にもわかったことなんですけど。〇〇に住所を移したんですよ、この〇〇支部の方に。その後、面接受けて13回全部落ちましたからね。その中でも、『ああ〇〇か』って言葉が出てきたりもあったんですよ。面接の場面で、『それ、どういうことですか』とは言ったんですけどね、『いやいや、そういうのじゃないんや』って。ほんで、今まで僕全部一発で行きよった（同様の会社にはすべて合格してきた）のが、〇〇の住所に変わって全滅やったんですよ。勘繰りますよね、やっぱあるんかって」（⑨・四国・30代・男性・4、5年前）

本人が語る通り、部落が採否を判断する要因

となり不採用となっていることが推測される。しかし、「勘繰る」ところまで、「確認し抗議する」までは至らない。採否の判断は言わばブラックボックスの中で行われているに等しく、たとえ問い合わせても企業側が「関係ない」と言えばそれ以上の追及ができないためである。

「面接を受けて、住所を『〇〇です』って言うた時に、そこに大きなスーパーがあるんですけど、そこの南か北かと聞かれたんですよ、詳しく」「それを聞く必要があるんですか」「言いたくないんやったらかまわんのやけど」（というやり取りの後に）、『南の△△です』って言うたら『あっ』って言われて」「もう落とされましたね。南ってだけで」「職安に行って、『こういう事聞かれたけど』って尋ねて、職安の人が相手の会社に確認しても『そんなつもりで聞いたんじゃない』って。注意だけで終わり」
(⑤・四国・20代・男性・2年前)

引用したもの他、同様の経験を2人が語っている。就職差別に関しても、「事件」として顕在化されない事態が引き継がれていると言わざるを得ない。

3 日常生活での被差別経験—関係の忌避

「友だちからですね、『親が遊んだらアカン言うてる』って」「小学校低学年だったと思います【その子はそれで遊ばなくなるんですか】「まあでもばれんようになっていうんが、もう暗黙の了解みたいになってましたね」【その子のお家には行かれへんいうわけですよ】「はい。で、その子もこっちの自分らの地区には来られへんみたいな」(⑥・四国・30代・男性・20年前)

「(中学の時)友だちの家に行って、要するに部落外のところに行って、その時に入らせてもらえなかった、俺だけ。親に『どこから来たん』って言われて、『〇〇から来た』って言って、『〇〇のどこ』って聞かれて、『南』って言ったんですよ。そしたら、『もうあかん、帰って帰って』って言われて」
(③・四国・30代・男性・15年前)

子どもの遊び仲間について、その親が部落を理由に「遊んではダメ」と告げる、という経験は他にも数例語られた。20歳前後という若い層においても経験されており、以前と変わらぬ姿で部落差別が残存していると言わざるを得ない。この他、大人同士で関係を忌避する陰湿な事例も語られた。

「一般の方が、何も知らずに遠方から引越してきたんですよ。ほんで、ムラから外れたところの幼稚園に子どもさんを通わしとったんですね。そこで『〇〇に住んでる』と言ったら、次の日から他の保護者が無視したと。ほんで、その人は初めておかしいってゆって調べたら自分が住んでるところが部落やったと。その人がどういう行動に出たかということ、不動産屋に『詐欺や』って言って電話してですね」(④・近畿・20代・男性・10年前)

「親から、祭りの時に神社に入れんかったと聞いたことがしょっちゅうあった」(⑥・四国・30代・男性)と、地域社会レベルでの関係の拒絶経験が語られたが、関係を忌避する差別は今日でも引き継がれている。では、部落へのどのような意味づけが忌避をうながすのだろうか。

4 差別的なメッセージの流布と遭遇

部落について「怖い」といった内容の話を聞いたことがある、という率が6割を超え、そのうち家族や職場の人、友人といった身近な人から聞いた人が多数を占めるという結果が、部落問題に関する意識を問う最近の調査で明らかにされている(大阪府2011)。今回の聞き取りからも、同種の経験が語られた。

【部落問題を知ったのはいつ頃ですか】「中学校ぐらいですかね。『あそこヤバイ』とか言うじゃないですか。ああいう感じ」

(⑦・四国・30代・女性・15年前)

「会話の中で、『あそこ怖いんやねー』とかそういうのは。それも差別体験なんだろうけども、ちょこちょこありましたけど」
「高校の時に、同級生とかが話してる中で出てきたりとか。大学の時にアルバイトしてた時に、バイト先の人で『あの辺気をつけないかん』とか、そんなのはありましたけど。自分のところをそんな感じで『あの辺やんね』みたいな感じで」(②⑥・九州・30代・男性・20年前)

「18で就職して大阪行った時に、大阪の友だちから、『こっちは行ったらあかん』ゆうて。『危ないから』とか、『怖いから』とか。僕はそれ部落いうのすぐわかったんで、『何で?』って聞いたんですよ。『いや、怖いから』ゆうて。『誰に聞いたん?』ゆうたら『親言うてた』ゆうて。そこで、『僕も部落やで』ってその子に伝えたんですけど。ほんならビックリして。『俺も怖いか?』って。『偏見でもの言うたらあかんぞ』って」「(その子は) わかってくれて」

最初の語りは、部落の男性と結婚する前の学校時代の経験であり、友人関係の中で、おそらくは親などから聞いた内容の「受け売り」のような形で「怖い」「ヤバイ」というメッセージが流布されていることがわかる。続く2例も含めて、意識調査で確認された流布の実態を示すものである。「怖い」というメッセージが特定の対象地区を想定して伝えられていること、親や身近な人が口にした内容がある程度のリアルティを伴う、信憑性があるものとして受け止められていることがわかる。

そしてもう一点、そうしたメッセージがやり取りされる身近な関係の中に、当事者である部落の人間が加わっているはずはない、という前提があることも読み取れる。

「(非常勤で勤めている職場の、年配の同僚と)話してる時に、『お前、試験受かったんか?』っていう話から『市役所も受けたけど、あかんかった』と答えると『市の三役もこれやからなあ』って、ポンと指4本出されて。その時に『俺も部落やぞ。どういう意味で言うたんや?』ゆうて」【出身の人だっという認識はその人間にはあつてのことなんですか】「いや、全然知らなかった言うてました。そんな仕事場に部落の人が勤めているとは思ってなかったと」【じゃあ心配してくれたみたいな関係なんですね】「教えといたろうってゆうような感じで、『市役所の三役もこれやあ』ゆうて」(④①・近畿・30代・男性・10年前)

「会社やプライベートの飲み会で、自分の地域のことを悪く言われたりするんですよ。隣の支部とか。確かにガラは悪いです

からね。そういうの、けっこう大人になってからの方が聞きますからね。『あそこはあだから』とか。そういうのを聞くとちょっとつらい」【本人がそこにいることを知らずに】「知らないですね。だから、完全に見下しているというか。ホワイトカラーで、僕みたいに普通の仕事をしているのに、普通という言い方はよくないでしょうけど、そういう人間がその場にいるとは思ってないですよ。下に見ているというか」(27・九州・30代・男性・最近)

前者は、差別的なしぐさも加わった露骨な差別事件であるが、目の前にいる人間が当事者の一人であることがまったく想定されておらず、また、「教えといたろ」という、言わば「善意」でなされていること、さらに、「試験に落ちた」という話への返答であることから、「同和地区の人間が優先して役所に採用されている」という逆差別的な意識の表れとしての言葉であったことが読み取れる。そして後者は、若い人たちが同士の会話の場面についての言及である。「そういう人間がその場にいるとは思っていない」者同士の日常のやり取りで流布される「怖い」というメッセージが、その場に居合わせた部落出身者を傷つける経験となっているのである。

さらに、近年の「同和利権」をめぐる報道についての話題が、そうした場で口にされることを同じ男性が語っている。

「(同和関連の不正が)テレビで事件になったりしてますけど。ああいうことするやつ、ほんとやめてくれないかなと思って。ていうのが、飲み会の時にちらっと話とか出たりすると、ほんと萎えるんですよ」【自分が出身だとは】「言えないですよ。言えないですよ」(27・九州・30代・男性・

最近)

「同和利権」、同和対策を巡る不祥事に関連しては、「『お前とこは大丈夫なんか、そんなことないか』っていうのを言ってきたりして」「からかってんのか。話したいんか。よくわからないですね。たぶん冷やかしたんかな。でも、仲いい子やったんで」(32・近畿・20代・男性・最近)という語りもある。さらに、部落問題に関連して否定的なメッセージが大量に流されているインターネットに関しては、地方の対象者が次のように語っている。

「(ネット上に)嫌がらせて、そこの地域に住んでる子の名前を出して、みたいななんもあるんで。そんなを削除依頼かけたりとか」(8・四国・20代・男性・最近)

(最近、ネットに書いてある部落についての書き込みの内容に抗議する文書を貼った)「部落出身だから、口が悪いし、こういうことを言ってくる、みたいな(反応が書き込まれた)。部落出身だから俺らが悪者なわけないんやけど、でもそうなる、必然的に。『部落=悪い』っていうイメージが世間一般ではそうなると思う」(11・四国・10代・男性・最近)

「部落=悪」というイメージが広まっている、という認識が語られている。それは、従来から根強く流布されてきた「怖い」というイメージに、やはり従来から持たれていた「ねたみ」「逆差別」の意識が加わり、さらに近年の「同和利権」報道に触発された否定的なニュアンスが加味されて形成されたものと考えられる。一方的なメッセージ、イメージの押し付けのなかで、返答できない、「ネット上の削除要求」以外に

なすすべはない、という実態なのだろう。

3 地域と時代の問題

1 地域による状況の差異

今回、地域による生活や差別状況の違いを捉える目的で、西日本各地のさまざまな地域で調査を行った。「田舎なんで、都会ほど隠せないから、絶対ぶち当たると思うんで。もう、言った方がいいと思うんですけど」(⑦・四国・30代・女性)という女性は、都市部に比べ部落の可視性が高く差別を受ける心配があり、子どもに部落差別についての認識を早く伝えようと考えている。今回得られた語りの中で興味深い点は、こうした都市—地方の違いだけでなく、ある地域の中でも部落差別の厳しい地区とそうでない地区に分かれるという言及が複数あったことである。

「地区によって、差別の度合いが違うっていうのも変なんですけども。△△市の○○なんですけども、そこはもう他の(地区外の)アパートを借りることも出来ん⁽¹⁾、就職もなかなかできんというのが現状であるんですよ。全然地区によって違うんですけども、どぎついすね○○の場合は」

(⑨・四国・30代・男性)

「同じ県内でもすごく厳しいとこと、まあまあそうでもないところがあるじゃないですか」(⑦・四国・30代・女性)

地域による差別状況の差異に関する言及では、それをもたらす要因として部落の可視性に関する指摘がなされている。「田舎なんで、住んでるとこ言わんでも名字だけでわかるし」

(⑦)という指摘に加え、他の住宅とは違った同じ規格の住戸が孤立したかたちで並んでいるといった、文字通りの可視性の高さについても語られた。

「(住んでいる所が部落だと)何でわかったんでしょね。まず家の建ち方が違ういうのと。同じような感じの家が並んどって、はい。密集しとって、家が。なんでよそと違うんやろいうか」「(周りの友だちには)もう見たら丸わかりやから。やっぱ仲良くなったら、よう遊ぶやんか。まあここに来た時点でもうわかるから、言わんでも」

(⑤・四国・20代・男性)

これは農村的な景観が残る地域での経験であるが、大都市部であっても、大規模な団地に住んでいることで周囲からは部落だと知られていたという語りがあった他、先に引用した幼稚園での保護者による無視という事例は、大都市郊外のホワイトカラー層が多く住む住宅地での出来事である。差別の現れの程度について、都市—農村の違いと単純に考えることはできない。また、解放運動、同和教育のあり方との関係についても、今回の聞き取り調査で得られた情報の限りでは、運動が盛んに取り組まれた地域ほど差別の程度が他と比べて軽い、あるいはその逆といった関連は見られないようである。

周囲の差別意識の程度や差別事象の現れ方についての地区間の差異とそれをもたらす要因については、差異自体を確かめることが困難であることは言うまでもないが、部落差別撤廃に向けた今後の取り組みを構想するに際して解明されるべきテーマの一つである。この問題を検討する際の手がかりとして、今回の語りのなかで気になるポイントを指摘しておきたい。「どぎつい」差別を受けている地区の存在に言及した

協力者は、次のように続けている。

「普通にアパートも借りる事が出来ん状態やから、だからその、なんていうんですか、いわゆるそのアウトローが増えるんですよ、アウトローも比較的多い地区なんですけども」(⑨・四国・30代・男性)

「アウトローが増える」というのは、仕事面の不安定性から「まっとうな」仕事以外で生活の糧を得ざるを得ない人間が出て来るという事態を指すのだろう。「ガラが悪い」という表現を今回の聞き取りで複数回耳にしたが、そうした状況についての外部からの評価を示すものと思われる。都市部から遠く就労先が限られている、従来盛んだった地元有力企業が衰退しその関連会社の雇用が失われた、同和対策が盛んになされていた時代は地区内に建設会社があり働き口も豊富にあったが現在はその多くが休業状態にある、など、地区の雇用状況の悪さについての多数の言及があった。こうした、生活の基盤となる就労の不安定性が背景にあるはずだが、一人親家庭の多さなど家族生活の不安定性や、高校中退、非進学者が珍しくないなど深刻な教育面の課題を指摘する協力者もいる。さらに、いったん地区外に出て離婚等で戻ってくるケースが珍しくない、との指摘が多くの地区で聞かれた点が興味深い。

【離婚して地区に戻ってくる女性が多いと聞いたが、離婚の原因に差別が絡んでるかもしれないですね】「はいはい。絡んでるケースもあると思いますね」「僕は、そのケースが圧倒的に多いと、見てる限りは思うんですよ。部落差別的なことが原因で、たとえば離婚とか、社会的に何らかの問題が生じたときに、そのまま部落とは縁を

切って違うところに行こうって思う人は少ないんじゃないですかね」(⑭・近畿・20代・男性)

大阪では生活困難層が地区に流入、定着するケースが多数にのぼるという実態調査の結果もあり、「生活しやすい」という風評がその背景にあることが指摘されている(奥田 2009)。これらは、生活基盤が脆弱、不安定な者が部落に留まり、あるいは集まるメカニズムの存在を示し、それに同和行政の終了と日本社会全体で進行する雇用の不安定化の動きが合わさり、従来から脆弱であった部落の生活がさらに厳しいものになっていることが推測される。その中であって、より不利な条件に置かれ、あるいは何らかの歴史的な経緯があった地区については、人々の生活の困難さが他の地区よりも顕著な形で現れることになり、周囲からの差別的な評価も厳しいものになる、という経過があるのかもしれない。

「僕の住んでる地域が、△△町の○○というところが被差別部落なんですけど、他の△△町の人たちの方がたぶん結構多いと思いますね、あんまよお思っていないが。僕らのところのことを」(⑧・四国・20代・男性)

前節で触れた就職差別も、こうした地区への否定的な評価がその背景にあり、さらにそうした差別が人々の生活機会を大きく制約することで生活の不安定性を維持、強化させ、「ガラが悪い」という現実がさらに生み出されるという悪循環が生じていることが考えられる。

2 時代状況の変化

前項で見た地域の問題については、雇用の不

安定化という社会全体の変化と同和対策の終了という時代の変化のなかで、今後多くの部落に同様の事態が広がることが懸念される。こうした、職業・生活面での時代の変化に続いて、解放運動と差別の現れについての変化の問題を整理していこう。

今回の調査協力者の大半が、小中学校時代は解放運動に支えられた子ども会での生活を経験し、部落差別についても子ども会での学習で認識した者が多い。そして、大学に進んだ者については、多くが解放奨学金を利用している。しかし、2002年の法期限切れにより地域の運動のあり様は大きく変化したのであり、協力者の多くは解放運動の中で子ども期・若者期を過ごした最後の世代といえることができる。

その後の世代の状況の変化について多くの語りがあがるが、その典型的なものを紹介する。

「僕とかの年でやったらまだ差別事件っていうのが僕も遭ったことがありますし、やっぱりゴロゴロしてたんですよ。特に恋愛結婚差別事件なんかは特に多かったので、見えへんところで。ただ、今の子らが（差別が）ない分ね、ないというか、薄くなってるといって」「実感がなくなりすぎてきている。もう、『差別いっしょになくそおや』って言うて集まる子はゼロやと思いますね」（③⑩・近畿・20代・男性）

「（解放運動に参加しない若者は）直接は自分が差別受けてない子が多いと思うんですよ。『差別があるやろな』ぐらいはたぶんわかっとなんやろうけど、問題意識っていうんがないのかなと思ったり」（⑬・四国・30代・男性）

身近に差別を見聞きすることが少なくなり、

実感が持てないという指摘であるが、2節でみた通り、差別は残存し潜在化している現実もある。そして、大きく変わりつつある点として、解放子ども会が「消滅」⁽²⁾することで、部落差別について子どもたちに伝える場が失われていくことが重要な意味を持っている。

「（自分の年代は身近に差別事件が多かったが）もっと下になれば、それが自分への差別やっていうのをわかってない子もやっぱり出てきますよね。解放子ども会とかも希薄になって来て、消滅してきた年代とかに入るんで。今の20歳前後になったら」

（③④・近畿・20代・男性）

「怖い」というメッセージが日常生活圏で流布され続け、そこに「逆差別」「利権批判」のニュアンスが加わり「部落＝悪者」といったメッセージがやり取りされている状況を先に整理した。学校や職場、友人や恋人との関係の中で、何も知らないままに「怖い」というメッセージを耳にしたならば、その内容を正しいものとして受け入れてしまうことも考えられ、自分の地域の「ガラの悪さ」に引き付けて理解する者も出てくるだろう。さらに、部落を理由に関係を拒まれるという経験をいきなり強いられるという、解放運動以前の状況の再現すら危惧される。

今回の協力者の多くがすでに親となっており、子どもが受けるかもしれない差別についての不安が繰り返し語られた。下の世代が差別を受けた時の支えとなるために地域での運動を続けると語る者もいる。

「自分が隠してたとして、大きくなって付き合うにしろ、結婚するにしろ、『あんたとは結婚できんよ』って言われる時が来るとするじゃないですか。…『ほんとのこと

教えてくれたら良かったやん」とか後から言われるんだったら、もう先に」(20・九州・30代・女性)

「下の子らが、もしかしたら痛い目に遭うかもしれない。受けるかもしれない。だからこそ(運動に)残った」下の子らとか、恋愛する時にでも、『自分たちにもそういうことが起きるかもしれないよ』って言うて、『そうなった時には、一人で悩まないで、必ず帰って来なさいよ』って言うて」(43・近畿・30代・女性)

4 対抗メッセージの構築と発信

対象者の一人は、「ネットでデマが広がるのといっしょで、どこ行っても部落の人間は悪者になっちゃう。『ほんとのことはこういうことなんです』っていう情報は、マニアックな本にしか載ってないじゃないですか。ああいうのをもっとインターネットを使って広く知らせるやり方を考えてます」(27・九州・30代・男性)と話してくれた。本論文で整理してきた部落の若い世代の状況は、従来から引き継がれた部落への否定的なまなざしに新たな要素が加わり、「部落=悪者」とするメッセージが日常的にやり取りされ、結婚や就職で差別に遭う可能性もある。さらに、差別を受けるかもしれない当事者自身が部落についての認識を持ってなくなりつつある、というものであった。こうしたなか、誤解と偏見に満ちた差別的なメッセージに対して、「それは違う」という対抗的な発信が緊急に求められているのである。

それでは、どのような内容がそこに込められるべきだろうか。その手がかりとして、2人の語りを取り上げよう。

「(部落問題を理解するなかで感じたことは)何か、もやもやと何か、生まれたところが部落で、部落の人って差別されて、みたいな、何か、ボヤーンとして。で、『あそこって部落みたいな地域らしいで』みたいな、そういう、バイトで噂話とか聞いた時に、そういう名前は知っていて、『その出身やで』と思っても、よくわからないから、言い返せへん自分が悔しいな、みたいな、とかあったんで。知って行って嬉しかったですね」(35・近畿・30代・女性)

「いいことも悪いことも、子どもに全部伝えようと思ってます。(部落にあった)貧困とか。それは事実だし。それがあって、沸き立つものと言うか、それを打開したいという沸き立つものがあって。だから僕はすべてを伝えようと思ってますね。じゃないと、いいとこばっか伝えとったら、本当にそれこそ部落差別、自分の子どもが出遭った時に、対処できるかって思うんですよ」「(自分が)子どもの頃からずっと、すっきりしないモヤモヤ感というか、苛立ちとか。父親がずっと仕事変わって長続きしない、『何でかな』みたいな。それで家の中がぎくしゃくするわけなんですよ」「(父親は)身体動かしてする仕事はいいけども、ある程度仕事慣れたら任せられていくじゃないですか。そうしたら伝票書かないかんとか。そんな時に漢字が出てこないとか。それでもう結局辞めるみたいな」「自分自身がマイナスで(受け止めて)来たって思うんです。部落のことであろうが親のことであろうが。そんなのがいっぱいあったんですけど、それを乗り越えて出会った人たちっていうのが、それも笑い飛ばせるというか、そんな魅力があったんですよ。自

分のことを語れてるというか。一番大きいのはやっぱりそこだったと思います」「一緒に活動していく中で、自分の中で蓋をしたものを外してもらったというか、そこに魅力を感じたんですかね」(26・九州・30代・男性)

「知って行って嬉しかった」という言葉に注目したい。別のインタビュー調査では、「知ることによって強くなれた」という語りを耳にしたことがある。他者の言動や身近な人の姿から、「モヤモヤ」した苛立ち、悔しさを抱いてきた。差別に直面して「心が折れる」という表現をした人もいたが、部落差別についての理解が深まれば、差別する側こそ問題があると受け止め、自身を責める意識から脱却することができる。その際、「仕事が続かない」父の姿、「ガラが悪い」と評される生活を続けざるを得なかった人々の思いや生活の背景を知ること、解放運動に立ち上がる人々の「沸き立つ」思いを知ることが大きな意味を持つはずである。今回対象者となった人たちは、親の世代や少し上の世代に、厳しい差別に抗って運動を担った人々が身近にいる。そして、自身や同世代の経験を踏まえて、次の世代に継承することの重要性を強く認識している存在でもある。自前で模索される対抗的メッセージが集約され、整備されることを期待

したい。

ここまでは、部落の子どもたち、若者たちにとっての意義を整理してきたが、対抗的なメッセージは、部落に否定的なまなざしを向ける部落の外の人々にとっても大きな意義をもつ可能性があり、そうした力を発揮できるよう構想される必要がある。「同和利権」への非難のコメントには、「生活保護を受けている人間も外国人も同じだ」といった記述が続く場合があり、自身の生活の苦しさについての吐露も見られる。今日、さまざまな形でなされている「利権」を理由とした弱者非難は、自身の生活の困難さ、不安と不満が「はげ口」を求めて形をとったものである場合が少なくないはずである(西田2012)。不安や不満がもたらされる元凶は、利潤最大化を追求する企業社会とその動きを許容する政治の在り方であるにもかかわらず、そこには目が向けられず、人々が抱く「モヤモヤ」が「下方」に向けて吐き出されている。そうだとすれば、罫とも言えるそうしたメカニズムに囚われている事態についての認識を促すことは、生き方を変える契機となり、部落外の人々にとっても「知ってよかった」と受け止める経験となり得る。単に部落への差別、偏見をなくす、という点にとどまらない大きな可能性を持つはずである。

注

- (1)「アパートを借りられない」実際の経験についての言及もあった。「一回地区から出たこともあるんですよ。家を借りるのに19件回ったんです。貸してくれないんですよ、〇〇って言ったら。家見るんも『外から見てくれ』とか。で、19件目に借りたんが、△△(他の地区)の近くやったみたいな」(6・四国・30代・男性・数年前)
- (2)解放運動、そして子ども会の変化のあり様について

も地域によって大きく異なっている。小中学校の教員の関わり方についても同様で、「いっせいにですね、結局、法律が切れた時点で、教職員がバーッと引いたんです」という語りもあれば、「今の先生はみんなもう地域に入り込んでます。地域のことをわかってくれる先生っていうのは、確実に増えてると思います」と直近の状況が語られる地域もある。こうした多様性をもたらす要因の解明も重要な課題である。

引用・参考文献

西田芳正（2012）「『逆差別』意識の構造と教育・啓発の課題」、大阪府『府民人権意識調査報告書 分析編』。

奥田均（2009）『差別のカタクリ』解放出版社。

大阪府（2011）『府民人権意識調査報告書 基礎編』。